

オフラインの君に
恋をした

1

- ♡ 純愛
- ♡ ラブラブ
- ♡ 小スカ
- ♡ お漏らし
- ♡ イケメン×イケメン

俺は伊武 湊。とある人と会うために駅の待ち合わせスポットに来ている。今までいろんな人に会ってきたし、初めまして～ってしたことは何度もある。だから柄にもなく少し緊張してる自分にびっくりしている。

「あと一駅で到着します」という相手からのLINE。「はいよ～」とだけ返してスマホから目を離す。出口を指定しておいたから、おそらくあの出口から出てくるだろうと思い、改札出てすぐの目印のところで待つ。数分してから多くの人が改札からあふれ出てくる。その人込みにまぎれて、一人の男性が俺に近づいてくる。

「...イブくん...ですか？」

「そうだよ、おはよ」

「よかったあ、間違えてたらどうしようかと思った」

そう声をかけてきたのはRyo(りょう)くん。プロゲーマーの男の子。俺より歳は一個上なんだけど。男の子だけど声がちょっと高めでかわいい。

「イブくん背高いね」

「185あるよ」

「高っ！」

俺たちの出会いはゲームの配信。俺は10年ほど前からネットに踊ってみたの動画を投稿したり、暇があればゲーム配信などをしていた。もちろん当時は未成年だったから動画の投稿とかは親がやってたんだけど。未成年なのもあってインターネットに簡単に顔を出すなどと言われて顔はほぼ出してなかったんだけど、実はダンスの大会等で顔どころか本名も出てる。だからめんどくさくて今はネットでも本名で活動してる。せめてもの抵抗で表記はカタカナにしてるんだけど。

そんな俺のネット生活も長くなって、いろんな人との出会いもある。りょうくんはその中の一人。ただ、りょうくんとは配信以外でもオフで話すこともあって、なんだか気を許せる人だなんて話してて安心する。配信外でも一緒にゲームするようになったし、今日に限ってはまさかのオフで会ってる。なんか話の流れでそうなった。声が高めだから150センチくらいの小さい子が来るのかと思ったけど、思ったより小さくない。こういうと失礼だけど。

「りょうくん何センチ？」

「たぶん170くらい。5年くらい計ってないからわかんないけどそれくらいだったかも」

ちょっと見上げる形になっててかわいい。りょうくんは立派な成人男性なんだけど、小動物みたいでかわいい。

「Rりょうくんて顔出ししないの？」

「してもいいんだけど、するタイミングも理由もなかったからなんかそのままに」

りょうくんはゲームの公式大会でもマスク姿だったので、俺も顔は知らない。今もマスクしてるし。

「じゃあ俺と自撮りして顔出しちゃえば？絶対話題になるわ」

「え、イブくんも顔出すの？」

「うん。俺も顔出したのって取材受けたときの10年くらい前だし、それ以来出していないし。俺もタイミングがなかったってだけなんだけど」

正直俺も顔を出さない理由がない。別に出したっていい。むしろ出してダンス動画撮ったっていいんだけど、なんとなくそのままだったんだよね。いい機会だし一緒に顔出せるなら出しちゃおうと思ってマスク取ったりりょうくんもマスク取ってくれた。めっちゃイケメンでワロタ。

「イブくんイケメンだね」

「いやこっちのセリフだよ」

「背も高いから羨ましい」

「なんでこんなカッコいいのに顔ださなかったの？」

「こっちのセリフなんだよなあ」

お互い軽口をたたきながらスマホでカメラを起動させ、りょうくんも映るように自撮りをする。

「これSNSのつけていい？」

「いいよー。俺にも写真送って」

お互いそのままマスクをし直してスマホをいじる。SNSには【イケメンRyoちゃんと初エンカウント♡】ってちょっとふざけて投稿した。

「飯でも食べにいいこっか、おすすめあるから連れてくよ」

そうやって俺たちは駅を後にし、遅めの昼食を食べに飲食店へ向かった。

「え、やば、プチバズってて草」

「え？」

飯食いながらスマホ開いたらすごい通知の量。先程上げた写真が思った以上に反響があってめっちゃ反応もらってる。返信もたくさんきててびっくりした。まあお互いそこそこ知名度もあって突然の顔出しとなればそうかと今更ながら。「二人ともイケメン！」とか「距離近くない？」とかいろんなこと書かれてる。

「え、ほんとだー。イブくんイケメンだからだよ」

「いやりょうくんもイケメンだからね？」

「そんなことない」

りょうくんはこう言ってるけどまじで顔整ってる。自分で言うのもあれだけど俺も顔は整ってる方だとは思ってる。

「りょうくんてさ、名前の由来なんなの？」

「本名から。大会の時に本名出てるから調べれば出てくるんだけどさ」

「へーそうなんだ」

「良哉って名前だから、そこからとってる」

「へー良哉くんっていうんだ」

「うん、なんか活動名考えるのめんどくさくて」

なんて他愛のない会話をしてるときもスマホの通知が止まらん。めっちゃ通知鳴るスマホをそのままに飯を済ませ、その日は映画を見たり買い物をしたりして遊んで別れた。家に帰ってゆっくりするころには、SNSの通知がとんでもないことになってた。その日はりょうくんと遊んで疲れたし、配信はお休みして寝た。

りょうくんのことはもともと会う前から気が合うなって思ってたし、会ったら会ったでなんかもっとりょうくんのこと知りたくなってくる。気づいたらりょうくんのことを考えてる自分がいる。また今度遊びに誘って見よう。いうても結構な頻度と一緒にゲームはしてるんだけど。そうさ、今度ダンス動画上げるときに一緒に出てもらおうかな。撮影の現場も見たいって言ってたし、そういうこともお誘いしてみよう。

それからしばらく日数がたち、相変わらずの生活を送っていた。その間も何度か会って遊んだし、配信でも遊んでるし配信外でも通話してる。ほかにも仲のいい配信友達はあるけど、こんなになかよくなったのはりょうくんが初めてだ。そんなこんなで今日も配信外で通話をする。それで遊ぶ約束も取り付けたし、ダンス動画のお手伝いしてくれることになった。次に会えるのも楽しみすぎる。

数日後、俺はりょうくんとダンススタジオの最寄りの駅で待ち合わせしてる。実は今日、りょうくんは俺の家にお泊り予定だ。ちょっとウキウキしてる自分がある。楽しみすぎて早めに到着してしまった。でもなんかデートの待ち合わせみたいでいいななんか。しばらくしてりょうくんが来たので、スタジオに移動する。

スタジオに移動すると、Ryoくんは興味深そうにキョロキョロしてる。かわいい。りょうくんはダンスとかまったくできないらしく、一緒に踊るのは嫌だと断られた。でも声をのけたりちょっと映るくらいならいいよって言われたので、撮影のちょっとしたお手伝いをしてもらうことに。おかげでいい動画になりそうさ。

「ダンスうまいのいいな。かっこいい」

「りょうくんも練習すればできるよきっと。なんかスポーツとかやってたの？」

「俺ずっとバスケやってた。大学に入ってからなんとなくやらなくなって、そこからゲームにはまったんだよね」

「へーそうなんだ。俺はダンスのほかになんかサッカーもやってたんだよね」

「スポーツ万能だ」

「そうでもない、テニスやバドミントンみたいな道具使うスポーツは下手だった」

「意外だね」

撮影自体も和やかに済んで、気づけば夕方。そろそろ家に帰るための準備をする。ついにりょうくんがうちに来るのか…。あ、ちなみに一人暮らしなんで親が～っていう心配もない。実はこの場所から比較的近い場所に家があるのでタクシーを呼んで優雅に帰宅。自宅マンションの鍵を開けてりょうくんを中に入れる。

「ごめん、シャワー浴びてくるからその辺でくつろいでおいて」
「ありがとう」

ダンスして汗かいたので先にシャワー浴びさせてもらうことに。リビングのソファを指さしてから着替えを持って風呂場へ。シャワーを浴びてさっぱりしてからりょうくんのもとに。りょうくんにもシャワー浴びてもらうために場所を案内し、タオルとか用意してあげてからリビングに戻った。ソファでスマホをいじってたらしばらくしてりょうくんが戻ってきた。ソファの隣に座ってきたのでそのまま談笑をする。

「りょうくんって彼女いるの？」
「いたらこんなに配信できてないよ笑」
「まあ確かにそうか、俺もないし笑」

男同士、下世話な話もしたくなる。実はこういう話をしたかった。ていうかりょうくんのことを知りたかった。

「いつから彼女いないの？」
「え…俺彼女いたことないよ」
「え！？そうなの！？」

正直驚いた。こんなに顔もよくて性格もいいから絶対過去に彼女いると思ってたのに。

「なんで？好きな子とかいなかった？」
「うーん…あんまりそういうことに興味がわかなかったというか…」
「へー珍しいね。え、童貞？」
「あ、うん」

それを聞いて俺の中の何かのスイッチが押された。

「じゃあ、触られたことないんだ？」
「何を？」
「こことか」

そういつてりょうくんの股間に手をやると、りょうくんはびっくりして俺の手を掴んだ。

「俺に触られるの、嫌？」

「え、い、いやじゃ...ないけど、そういうことじゃ...っ！」

俺の手を強く拒むわけでもないし、いやじゃないと聞いて俺はりょうくんの服の上から揉んだ。りょうくんはびっくりしてどうしたらいいかわからないような顔をしてるが、手の中のものは徐々に反応を示してくるし、りょうくんの体も快感に震え始める。

「あ、あっ、まって...あっッ！」

俺の手を離そうとするりょうくんがかわいくて思わずキスをする。そういえばキスもしたことないのかな。今更だけど。りょうくんは緊張からか唇をぎゅっと閉じてしまっている。そんなりょうくんの唇に何度も何度もキスをする。その最中もりょうくんの触る手を止めないから、りょうくんのはどんどん硬くなってくる。りょうくんはびくびくと体を震わせ、俺の服をぎゅっと掴んでる。かわいい。俺はちゅっと音を立てて唇を離す。

「きもちい？」

「あっ！は...まって、ちょっと...、まって...っ！」

必死に俺の服を引っ張って静止をかけるりょうくん、涙目になっててかわいい。仕方なく手を止めると、りょうくんは少し安心したように小さく息を吐いた。いきなりやりすぎちゃったかな。

「ごめん、いやだった？」

「そ、そうじゃないんだけど...さ...あの...」

「ん？」

なんとも歯切れの悪いりょうくん。目もうるうるとしてるけどめっちゃ泳いでる。いじわるに止めていた手を動かす。服の上からなのにりょうくんのはすっかり勃起上がっているのがいるのがわかる。それをなぞるようにしたから上に指を滑らせれば、慌てて手を掴んで止めてくる。

「あの...おれ...その.....出すと、あの...出ちゃう癖があって...っ」

「え？ どういうこと？」

そりゃあ射精すれば精液は出るが...まさか射精を知らないなんてことないよな??? そこまで純粹じゃないよな??? ?

「あの...引かないでほしいんだけど...」

「うん」

「えと...しゃ...しゃせ...すると...ち、違うのも出ちゃう癖があって...」

真っ赤になって一生懸命喋るりょうくんかわいい。にやける口元を抑えられない。俺はもうだめなのかもしれない。

「違うの？」

「.....お、しっこ...漏れ、ちゃう...んだよね...」

「...もしかして今まで彼女いなかったのもそれが理由？」

「それもあるけど...興味があんまり湧かなかったっていうのも本当...」

じゃあ別にトラウマになってるとかいうわけでもないんだ。なら問題ないな。

「かわいいね、気持ちよくなってお漏らししちゃうんだ？」

そう言って俺はりょうくんの下着の中に手を突っ込んで直接握る。同時に毛が無くて一瞬驚いた。りょうくんのをしっかりと握って上下させる。

「自分の手じゃなくて人にしてもらうの、きもちいでしょ？」

「ひ、あ！やッ、やだ、よご、しちゃう...っ！」

「掃除すればいいだけだよ、気持ちよくなっていいんだよ」

「っ！う、でちゃ...ッ！」

りょうくんは俺にしがみつくようにしながらも体を震わせ、ソレは限界を迎えようとしていた。俺はりょうくんをイカせるために強めに扱くと、感度のいいりょうくんは大きく体を震わせ、欲を吐き出した。

「あっ、あ、ああッ！！」

びゅ、びゅーっ！びゅるる！！びゅうっ！

「あっ...はあ...は...」

ズボンを脱がさないままだったので、りょうくんはそのまま下着の中に射精した。そしてそのままりょうくんのを握っていると、精液とは違う暖かい液体がちょろちょろと手を濡らす。

「や、イブさ...でちゃうから...！」

りょうくんはイったあとの力の入らない体で必死におしっこが出ないように我慢してるようだった。

「大丈夫、出していいよ」

「っ！あ...！」

俺がそう耳元でそう呟くと、りょうくんは目に涙を浮かべながらふるりと体を震わせ、俺の握ってるりょうくんのちんちんから徐々におしっこが漏れ始めた。